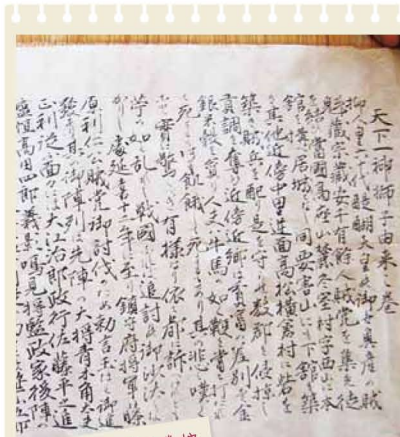


# 関白流獅子舞発展の謎を解く 「明治期関白神獅子舞の展開」

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司

栃木県内には、六十近くの獅子舞団体があるが、本県の獅子舞の特徴の一つに、流派を名乗る獅子舞が多いことがあげられる。中でも宇都宮市関白の「関白神獅子舞」を祖とする関白流獅子舞と、日光市文扶に所在した獅子舞を祖とする文扶流獅子舞は、本県獅子舞の二大流派として知られる。

関白神獅子舞は、地元に残る文書記録から、元禄十(一六九七)年ころには存在していたことが知れる。当初は個人的な意味合いが強く、後に道具の管理等の面から関白村の獅子舞となったものである。ともあれ関白獅子舞は、本県の獅子舞の中では起源が古く、各方面から注目された。先の文書記録によると、元禄十年ころに宇都宮藩主の前で獅子舞を披露している。天保九(一八三八)年に行われた宇都宮大明神(現、二荒山神社)社殿再建時の地鎮祭では、地固めの獅子舞を行っている。一



関白獅子舞由来之巻控



関白山神社境内での獅子舞

方、各地より獅子舞伝授の要望もあった。塩谷町船生寺小路には、文化七(一八一〇)年に関白村よりの獅子舞伝授書が、宇都宮市中里西組、同横倉には天保九年の伝授書等があり伝授の様子が窺える。

こうした関白獅子舞の活動に大改革の時期が訪れる。時は明治初期、天皇親政の新時代において、どのように対処したら村の発展に繋がるか、村民は腐心を巡らしたのである。村民が着目したのは、この地に伝わる平安時代の武将、藤原利仁の賊徒退治の伝説であった。

利仁伝説は京都鞍馬寺の「鞍馬蓋寺縁起」に記されており、概略は「その昔、下野国高座山の麓に藏宗藏安兄弟が首領となる賊徒達が民衆を苦しめていた。利仁は天皇の命を受けて派遣された。高座山の麓に兵を率いて到着したのが六月十五日、ところが利仁は降雪を予感し櫓を作り戦いに備え、深雪に難儀する

賊徒達を見事打ち破る」という話である。

関白村では、この話の後にさらに「利仁が亡くなり、葬儀の際に天氣が急変した。それは悪魔の仕業である」として獅子をかたどり舞った。すると雲が晴れて利仁の亡骸を無事埋葬することが出来たので、以来、獅子舞を行っている」といった話を付け加え、関白獅子舞の由来話を作り上げたのである。その上に、高座山の賊徒退治の話を獅子舞化して「鬼退治の舞」を新たに創り、明治十二(一八七九)年には、利仁を祭神とする高座山神社(現、関白山神社)を祀り、そしてこれら一連のことを「天下一神獅子由来之巻」として書き記し、巻物するとともに、新たに獅子舞伝授書を作成したのである。

こうした活動は、明治新政府に関白村民が抱いてきた尊王の心を認めてもらいたいとの思いと、これを機に関白獅子舞の名を高め、流派を確立することにあつたと思われる。その狙いは見事に当たつた。高座山神社は明治新政府より神社として認められ、また、従来より関係の深かった所はもとより、多くの獅子舞伝承地から先の巻物や伝授書の依頼が舞い込み、県内各地に関白流獅子舞が花開いたのである。

時代の変革にどのように対処したらよいか、関白の人々の明治初期の活動は、その手本といえよう。